

令和4年度

希望が丘高等学校一般入学者選抜試験問題

国語

注意

- 1 監督者の開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
- 2 問題は、1ページから8ページまであります。
- 3 解答は、すべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
~~~~~
- 4 解答用紙の※印の欄には、何も記入しないでください。
- 5 監督者の終了の合図で筆記用具を置き、解答面を下に向け、広げて机の上に置いてください。
- 6 解答用紙だけを提出し、問題冊子は持ち帰ってください。

|                  |   |   |   |   |   |   |                   |        |
|------------------|---|---|---|---|---|---|-------------------|--------|
| 受<br>験<br>番<br>号 | ： | ： | ： | ： | ： | ： | 出身<br>中<br>学<br>校 | 氏<br>名 |
|------------------|---|---|---|---|---|---|-------------------|--------|



問題は、次のページから始まります。

一

次の文章を読んで、後の間に答えなさい。句読点等は字数として数えること。

草紙や巻物などの薄絹の表紙はすぐにすり切れてしまうので Aコマると、ある人がこぼしたところ、※<sub>1</sub>頓阿法師が「薄絹の表紙というものは上下の Bハシのところがすり切れ、※<sub>2</sub>螺鈿をちりばめた巻物の軸というのはその螺鈿の貝が落ちてしまつてからがいいのだ」といったという話が『徒然草』にある。※<sub>3</sub>兼好は頓阿のこの言葉にいたく感心し、※<sub>4</sub>「心まさりて覚えしか」と記している。私もまたそのようなものの見方に大いに共感するのは、私がやはり日本人だからであろう。これこそ日本独特の不完全の美学なのである。

そこで私は新刊書を買うとき、書店の店員が表紙の上に包装紙でささらにカヴァーをつけようとするのを見ると、「あ、そんなことしなくて結構です」とことわり、出来ればセロハン紙も取り扱つてもらう。そして、たいへんいい気分になる。頓阿法師のようないつもになるのだ。『徒然草』のおなじ段には、「何でもひとそろいにそろつていないと気が済まない」というのは、つまらぬ人間の Cコンジョウだ」という※<sub>5</sub>弘融僧都の言葉が引かれている。弘融僧都によれば、「不ぞろいのほうがいい」のである。で私は古本屋

を歩くときには必ず弘融僧都の言葉を D肝に銘じ、一巻か二巻か欠けている全集でも平氣で買うことにしている。欠けた全集というのは値段がぐんと Eヤスい。何とも有難いことである。

といつても、私は本を道具のように考えているわけではない。本は読むためにあるのだから表紙が汚れていたり、破れていたつて中身とは関係ない、と割り切つているのではない。書物というものは内容とともに、①形もまた大切な要素だと思つてゐる。書物の魅力は往々にして、例外なくその装いにあるのだ。ただ、どんな装いが美しいのか、という美学が問題なのである。私は頓阿法師のように、②新しくピカピカの書物をけつして美しいとは思わないだけである。

なぜか。まだページを繰つたことのない新しい本には読書の歴史がないからだ。まつさらというのはそれなりの魅力かもしれないが、こと書物に関しては真の美しさとはいえない。書物の真の美しさとは、その本がどれだけ読まれたか、という読書の歴史がつくりあげるものなのだ。ただし、その歴史は、あくまで自分がつくりあげた歴史でなければならないこと、いうまでもない。つ

まり、一冊の書物を一種の芸術品にまで仕上げること、それが読書なのである。そんな芸術品をいくつ持っているかで、その人の精神生活の価値がきまるのだ。「読書百遍<sup>ひやっぴん</sup>、義おのずから見わる」<sup>あら</sup>とは中国の名言であるが、私はむしろ、それをこういいかえたい。「読書百遍、美おのずから見わる」と。

(注)※1・5 頓阿・弘融：どちらも当時の僧。頓阿は歌人としても有名。

※2 螺鈿：おうむ貝・夜光貝などの真珠に光っている部分を切り取って漆器などの表面にはめ込んだもの。

※3 兼好：『徒然草』の作者、吉田兼好。

※4 「心まさりて覚えしか」：感心させられた。

③書物の美とは、繰りかえし読むことによつて書物にじんでくる美しさである。すなわち、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は貝落<sup>おち</sup>てこそいみじけれ」といった頓阿法師の愛<sup>め</sup>でるあの美しさだ。

(森本哲郎『読書の旅』による。一部改変)

問一 傍線部A～Eの漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 波線部「これこそ日本独特の不完全の美学である。」とあるが、文節に分けるとどうなるか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これ／こそ／日本／独特／の／不完全／の／美学／で／ある。

イ これこそ／日本独特／の／不完全／の／美学で／ある。

ウ これこそ／日本／独特の／不完全の／美学である。

エ これこそ／日本／独特の／不完全の／美学である。

問三 傍線部①「形」とあるが、これとほぼ同じ意味で使われている言葉を、同じ段落の中から抜き出して答えなさい。

問四 傍線部<sup>②</sup>「新しくピカピカの書物をけつして美しいとは思わない」とあるが、筆者がこのように思う理由は何か。次の空欄（　　）に入る適当な語を、本文中から五字で抜き出して答えなさい。

ピカピカの書物には（　　）がないから。

問五 傍線部<sup>③</sup>「書物の美」に対する筆者の考えに合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大切に扱うことによつて、古書になつてもにじみ出でてくる装いの美しさ。  
イ 簡素な装いであればあるほどにじみ出でてくる日本的なものがもつ美しさ。

ウ 見た目の装いの美しさではなく、読書の歴史によつてつくりあげられにじみ出た美しさ。  
エ 見事な装いの本が古びることで、さらに味わいを増してにじみ出でてきた美しさ。

問六 次の会話は本文の内容を説明したときのものである。次の空欄 □ ア □ ウ □ オ □ に入る適当な語を、本文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。ただし、アは三字、イは九字、ウは三字、エは三字、オは五字とする。

中西さん：作者は書物のことを一種の □ ア □ と言つてたね！

深見さん：書物の真の美しさというのは、その本が □ イ □ という自分がつくりあげた歴史とも言つてたね。

中西さん：そうだね。作者がこのように考へるのは、『□ ウ □』に出てくる言葉に共感していたからだね。

深見さん：表紙が □ エ □ いたり、一巻か二巻か □ オ □ 全集を買つていたりしていたね。僕も、僕だけの読書の歴史を作つてみようかな。

問七 『徒然草』は隨筆であるが、隨筆の作品を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 万葉集 イ 土佐日記 ウ 枕草子 エ 平家物語

次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

宰相殿の家では、夜になると庭に正体のわからない女が姿を現すことがたび重なっていた。

ある一人の小侍、※<sub>1</sub>かの屏風を見てア「言ふやう、①このころ」※<sub>2</sub>御内の人があやしみあひける女は、この絵の内にこそあるなれとて、※<sub>3</sub>傍の人をa呼びて見するに、※<sub>4</sub>げにも夜な夜な見しごとく子抱きたる女あり。②あやしがりて、その絵の頭に細き紙を張りて置きければ、その夜よりは※<sub>5</sub>先の女、頭に紙の付きたるままにて、※<sub>6</sub>壺前栽の内にイ遊びゐたりける。※<sub>7</sub>「さればよ」とて、③そのよし宰相殿に申しければ、絵師どもを※<sub>8</sub>召してかの屏風をb見せ給ふに、みなみな驚きて、「これは※<sub>9</sub>土佐の光起が筆にて、めでたく書きなせしものなれば、※<sub>10</sub>さる奇異の事もありしならん。」と申しければ、それより深く秘蔵仕掛けるとぞ。

(『落葉物語』による。一部改変)

(注)※<sub>1</sub>かの屏風…この家で長く使われずに保管されていた古い屏風。

※<sub>2</sub>御内…お屋敷内。

※<sub>3</sub>傍の人…仲間の僧。

※<sub>4</sub>げにも…たしかに。※<sub>5</sub>先の女…例の女。

※<sub>6</sub>壺前栽の内…中庭の植木の間。

※<sub>7</sub>さればよ…思つた通りだ。

※<sub>8</sub>召して…お呼びになつて。※<sub>9</sub>土佐の光起…江戸時代の高名な画家。

※<sub>10</sub>さる奇異の事…ありしならん…そのような奇怪なこともあつたのだろう。

問一 傍線部 ア「言ふやう」・イ「遊びゐたりける」を現代仮名遣いで書きなさい。ただし漢字はそのままで構わない。

問二 傍線部 a「呼び」・b「見せ給ふ」の主語を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小侍 イ 子抱きたる女 ウ 宰相殿 エ 絵師ども

問三 傍線部<sup>①</sup>「このころ」から始まる「小侍」の言葉はどこまでか。最後の三字を抜き出して答えなさい。

問四 傍線部<sup>②</sup>「あやしがりて」の意味として適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気の毒に思つて イ 不思議に思つて ウ 不快に思つて エ 厄介に思つて

問五 傍線部<sup>③</sup>「そのよし」とあるが、小侍は何を宰相殿に話したのか。次の空欄□に共通して入る適當な語を、現代語で書きなさい。

夜になると正体のわからない女が現れるため、屏風の絵に□を貼つておいたところ、その夜から例の女の頭に□が付いたまま、現れるようになったということを話した。

問六 小侍から屏風のことを聞いた宰相殿は、最終的に屏風をどのように扱つたか。適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気味が悪い絵だと感じて、深いところに埋めた。 イ 高価な絵だと知り、友人に売った。  
ウ ひどい絵だと言わされたので、屋敷の外に捨てた。 エ すばらしい絵だと思って、大切に保管した。

次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

天保五（一八三四）年五月（X）日。朝から空は青く晴れ上がり、五ツ（午前八時）を過ぎると二三が遊ぶ庭にも陽光が届いていた。

「くる、そつちに行つたら駄目だつて」

庭を駆け回る犬を、二三が呼び止めた。走っていた犬が立ち止まり、二三にAフリ返った。

くるは二三の誕生に先駆けて、父親の亮助が浜の漁師からもらつた犬だ。

「犬は安産のお守りだからよう」

二三誕生の数日前にもらつてきた子犬は、二三の誕生までは名なしだつた。が、鼻が真っ黒で黒目の大きい子犬を見た亮太とみさきは、勝手にくろと呼んでいた。

丈夫な二三が誕生したあと、子犬はくるとBメイメイされた。

二三と同い年の四歳だが、くるはもはや成犬である。それでも犬なりに、二三とは格別の間柄であることをわきまえているらしい。まだこどもの二三には、ことのほか従順だつた。

「柏の葉っぱを踏んだら、おかあちゃんにC叱られるでしょ」

大きな犬が、子犬のようにクウンと鼻声で鳴いた。

「ほんとうに分かつたのかなあ」

二三は首をかしげながら、くるのあたまを撫でた。

今日は端午の節句である。亮太はもう十二歳で、しつかりと菜種作りの家業を手伝つていた。

「亮太はほんまによう働くのう。亮助さんが、うらやましいがね」

村の農家の女房は、亮太の働きぶりをうらやましがつた。周りからは一人前だとみなされている亮太だが、端午の節句の柏餅を、だれよりも楽しみにしていた。

柏は、新しい葉が出ると、古い葉を落とす。そのさまは、あたかも跡継ぎができたのを見定めて、家督を譲るかのようである。

端午の節句に柏餅を食べるのは、この柏の葉のありさまに、代々の一家繁栄祈願を重ね合わせて祝うのが、興りのひとつとされた。とはいえ、亮太が柏餅をだれよりも喜ぶのは、甘い物好きだからである。が、たとえそうであつても跡取りがすこやかに育つているのは、亮助とよしにはこのうえない喜びだつた。

それゆえ①よしは、毎年一家五人では食べきれないほど柏餅を拵えた。庭に干してあるのは、これから餅をくるむ柏の葉である。この朝早く、よしは庭にむしろをDシキ、百枚の葉を並べた。家族と一緒に、くるも甘い餅にありつくことができた。干された葉が、柏餅に使われることも知つてゐるのだろう。

二三に何度叱られても、くるは葉が気になつて仕方がないようだ。母親のよしは、台所であずきの餡を拵えている。七歳のみさきが、台所の隅で糀粉を練つていた。粳米を水にE浸けて柔らかくしたあと、風で乾かしてから粉にしたもののが糀粉である。これをよく練つたものを、柏餅の生地に使うのだ。

亮太の好物を拵えるのは、よしとみさきの仕事だつた。あずきの餡が、出来上がりつつある。甘い香りが、庭にまで漂つてゐた。二三とくるが、一緒に鼻をひくひくさせた。

「お昼過ぎには、柏餅ができるんだつて。お前も楽しみでしよう？」ワン、ワンと続けて吠えて、くるが尻尾を振つた。二三は、わざと顔をしかめた。

「おかあちゃんが蒸かしてくれるのは、おにいちゃんとお父ちゃんが、畑から帰つてきてからだよ。ちよつと畑を見に行つてみようか」

立ち上がつた二三が、先に駆け出した。くるがあとを追い始めた。小さな坂道を登つた先には、一面の菜の花畑が広がつてゐる。五月（X）日のいまは、花はすつかり落ちていた。花を落としたあとには、菜種が実を結んでいる。

問一 傍線部A～Eの漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 「柏餅」にまつわる話のように、日本人が幸せを願い、動植物の特性にあやかつて暮らしの中に取り入れてきたならわしが、本文中にもう一つ書かれている。次の空欄□ア、□イに入る適当な語を、本文中から抜き出して答えなさい。

□アを□イとすること。

問三 次に示すのは、ある生徒が、一三の家族のこの日の様子をノートに整理したものである。内容が正しくなるように、

□ア、□イには適當な語を、□ウには推測される内容を、それぞれ七字程度で書きなさい。

| 午後     | 朝から昼にかけて                |           |      |    |
|--------|-------------------------|-----------|------|----|
|        | 人物                      |           |      | 行動 |
| 家族そろって | 二三本人・犬のくろ<br>父親の亮助・兄の亮太 | 庭で遊んだ後、畑へ | アに励む |    |
|        | 台所で柏餅を作る                |           | ウ    |    |

問四 本文中の空欄（X）に共通して入る適當な語を、漢数字で答えなさい。

